

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 佐藤 将之

論文題目 園児の社会性獲得と空間との相互作用に関する研究 ―子どもの環境行動原論―

本論文は、子どもたちの行動様態を記述することで園児の社会性獲得と空間との相互作用を明らかにすることを目的としている。

近年、日常生活における遊び場の減少や社会進出する女性の増加など、社会や教育の変化により保育施設の果たす役割が大きくなり、幼稚園の保育園化、保育園の幼稚園化が進むなか、2002年公立の幼稚園と保育園が一つの園として初めて認可され、2004年には幼保の総合施設づくりが始まったことを社会的背景としている。

子どもたちは家族から離れ、他者と出会う園環境において自己を確立する。その時、様々な行動とともに園児たちには環境と何らかの関係が生まれ、様々な人間と共存することで環境を調節するようになる。本論文では他者との関係に覚醒していく様態を「社会性」とし、他者の存在を認識した上で彼らと共存しての振る舞い方の学習を「社会性獲得」と捉え、このような子どもたちの行動様態を記述することで園児の社会性獲得と空間との相互作用を明らかにすることを目的としている。

本論文での子どもたちの行動様態を捉える視点として、人間と環境を一体と捉えること、「ある人と他者との関係」を分析の単位とし人間と環境の関係を記述すること、「遊びの移行」の全体像を捉えること、行動をある時点ではなく流れゆくものとして捉えること、「生きられる空間」を捉えること、保育者がより建築家に近づき人間関係からみた空間の提案を行うこと、を特徴としている。

本論文は全3編、12章で構成されている。

I編では子どもたちの時間変化を明らかにした。第2章では10分単位に全員の動きを記録し園全体の時間変化を明らかにしている。第3章では園児個人に着目し、追跡調査によって個人の行動領域や交流する人数、動きや姿勢、交流のリズムについて、所属や属性の違いを明らかにしている。

II編では子どもたちの関係が変化する行動様態を明らかにした。第4章では1人では物理的環境の操作や体感、見たり見られたりする関係、一方的な視覚的聴覚的出力があること、第5章では交流を始める時には身体を相手に向けたり相手と同じ姿勢や目線になったり同じ動きを模倣する主体調節の特徴があること、第6章では子どもたちの「社会」が大きくなる時には参加者に対する許可や勧誘などのスタンスによって参与者への身体の向きや距離などが調節されていること、第7章では一緒に遊び続ける時には、姿が確認できたり、声が届く範囲を保ち続けたり、場を移ったり、環境の導入や遊離によって場の本質が変化すること、第8章では関係を構築した子どもたち同士の距離が離れていく時には、共有していた環境の喪失、新しい他者との関係の構築、新旧二つの関係を並行があることが明らかになった。

また、他者との関係の変化の循環をたどった4～8章から、主体には「認識」、「接触」、「調節」という3つの覚醒があり、これらが混在することで一緒に遊んでいる人数や子どもたち同士の関係が変化することがわかった。

第9章では、保育者がいる社会では、子どもたちは言葉での意志表示がなくても参与者として認識され、また、保育者を媒介としなくても、一番交流する頻度が少なかった所属の異なる異年齢同士が遊びに関連した会話をしていたことを明らかにした。

III編では子どもたちが共存することや主体からみた人間と環境の関係の様々なモデル提示を行なっている。第10章では1人ではいる時とみんなではいる時の子どもたちの空間形成を明らかにした。みんなではいる空間形成は、A.

物理的環境で囲いを作り内部で向き合うもの、B.建築的に特徴ある場に一時的に入り込むもの、C.物理的環境で囲いを作り外側を向いて周辺にいる園児に働きかけるもの、D.列に並ぶもの、E.遊びの対象を囲むもの、F.A-Eが複数連続してその間を行き来する園児がいる様なネットワークがあるもの、G.段差などを利用して行為を嗜好し反復や回遊性があるもの、H.競技、I.回れるものや集合の周りをまわるもの、という9分類ができ、みんなでいる時にもこのように形成した空間だけではなく周辺環境との関わりをもつことで、遊びが展開したり、関係を持続する要因となっていることがわかった。

第11章では「認識」「接触」「調節」という視点から、他者との関係に覚醒する子どもたちを再考した。子どもたちは関係しあっているセットや、周辺環境との関わり合いの中で、主体や物理的環境を調節し、接触したり、関係を構築、持続している。また、周辺環境を認識するが、他の集合の周縁を利用し始める共存もある。この様な物理的環境的に離れた環境の選択をし、自分の目的を達成することも、他者と共存していくための重要な調節である。

このような「認識」「接触」「調節」の要素が混ざり合って起こる行動が社会性の獲得であり、子どもたちにとって様々な他者と共存する空間は他者と相互作用的に行動する社会性獲得を見出す場であるとした。

子どもたちは他者との関係で「認識」「接触」「調節」に覚醒し、それらが多様に混在して起きる行動が社会性として獲得されていることを明らかにしている。結論として、

- ・主体の動きや姿勢、視線の高さなどが他者と同調することで、子どもたちは関係を構築できる
 - ・子どもたちは相互認識を求め、空間に対応して主体を調節し、関係を持続する
 - ・子どもたちは遊具や家具によって活動領域を形成し、それを組み替えることで場の本質を変えたり、場を移り物理的環境を利用することで、社会の活動を変化させる
 - ・社会は、周辺環境との関わりによって、活性化したり、周辺環境へ移行し始める
 - ・子どもたちは既存の集合を認識し、その周縁に空間を形成する棲み分けを行う
- といった社会性獲得と空間との相互作用を明らかにしている。

最後に、子どもたちが社会性を獲得するための環境デザインとして、子どもたちの動きや姿勢や設えなどの質の異なる場を認識しあえる視覚的な関係を作ること、所属や属性の異なる子どもたちの偶発的な出会いを生むコーナー等を設定すること、自ら空間を形成することができ調節しあえる家具や遊具を提供すること、特徴的な建築的仕掛けや物理的環境を提供することを提言している。

以上のように本論文では、子どもたちの行動様態を綿密に観察・記述することによって、園児の社会性獲得と空間との相互作用を明らかにすることができた。この研究は、子どもの全人格的な発達過程における保育施設の担う役割を解明する一端となるものである。

本論文は、近年の社会情勢による要請に的確に対応し、子どものための環境の役割とあり方を明示し、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士(工学)の学位論文として合格と認められる。